

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 田中 綾

論 文 題 目

The role of surgery for locally recurrent and second recurrent rectal cancer with metastatic disease

(遠隔転移を有する局所再発・再々発直腸癌に対する手術療法の意義)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主 査 委員 安藤 雄一
名古屋大学教授

委員 長縄 慎二
名古屋大学教授

委員 碓氷 章彦
名古屋大学教授

指導教授 江畑 智希

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、切除可能な同時性遠隔転移を有する局所再発直腸癌に根治切除を施行した患者の予後を明らかにし、手術適応について検討した。さらに、遠隔転移切除歴のある症例と 2 回目の局所再発直腸癌の再切除が転帰に及ぼす影響についても評価した。検討の結果、同時性遠隔転移を有する局所再発直腸癌患者は手術適応があり、長期生存の期待が持てることが明らかとなった。しかしその治療の順番やタイミング、他治療の併用は考慮する必要がある。手術適応を決定する際には遠隔転移切除歴の有無は考慮不要である。2 回目の局所再発直腸癌の手術適応は、特に紹介患者においては予後が極めて悪いことを十分に考慮して決定すべきであることが明らかとなった。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 局所再発直腸癌の手術以外での治療成績は、5 年生存率が 4% と不良である。現時点で最も治療効果が期待できるのは外科的切除であり、単一施設での後方視的な研究ではあるが、局所再発直腸癌切除後の 5 年生存率は 38.6~47.0% と報告されている。今回の研究では、切除可能な同時性遠隔転移の併発症例や、遠隔転移切除歴を有する症例、2 回目の局所再発症例を検討しており、単純な局所再発直腸癌よりもさらに予後不良であることが想定される。本検討内では非切除例の検討をしていないものの、非切除での治療成績が不良であることは明らかである。
2. 重粒子線治療は、局所再発直腸癌治療において切除成績に匹敵する成績が示されつつあり、有効な治療方法であると考えられる。しかし腸管毒性による適応制限もあるため、それぞれの特性を考慮して治療選択をしたり、併用することでさらに予後延長が見込めると考えられる。
3. 局所再発直腸癌の治療は高度な技術を要するため、専門施設で外科治療を行うのがよい。手術治療の適応の是非や選択するタイミングは個々の症例により検討が必要であり一概にはいえないものの、症例を選択すれば、一見困難な症例でも切除により予後延長効果が期待できることを念頭に、治療可能な専門施設へタイミングを逃さずに紹介することが肝要であるといえる。

本研究は、局所再発直腸癌のなかでも、手術適応の定まっていない同時性遠隔転移を有する局所再発直腸癌の手術適応について検討し、さらに遠隔転移切除歴と 2 回目の局所再発直腸癌の再切除が予後に及ぼす影響について評価しており、局所再発直腸癌の治療法を確立する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	田中 綾
試験担当者	主査 安藤雄一		副査 ₁ 長縄慎二	
	副査 ₂ 碓氷章彦		指導教授 江畑智希	
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 非切除例との比較検討について2. 切除治療以外の選択肢としての重粒子線治療について3. 他施設で導入できる指標になりうるかについて <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				